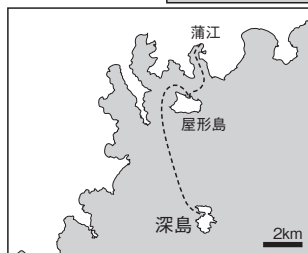


夫婦で守り伝える
島の味噌づくり

「でいぶまりん」運営／イターン 安部あづみ



深島：蒲江港から南9kmの日向灘にある岩礁、海食崖に囲まれた島。面積1.1km²、周囲4km、人口27人(平成30年3月末現在)。享保6(1721)年に本土から農民が移住して開拓、その後無人化するが、のちに佐伯藩の流刑地となり、明治5(1872)年に蒲江から移住して再開拓された。

住民一八人とネコ二〇〇匹の島

「ここに住みたい」深島に降り立ってすぐにそう思った。二〇一四年六月、国の事業を活用した深島住民とNPOによる離島活性化プロジェクトのボランティアとして訪れた。二年後、島で出会った夫・達也と結婚し、現在は夫とともに「深島みそ」の製造・販売、島唯一の食堂「深島食堂」や一組限定の宿泊施設「しんきや」の経営、マリンスポーツのガイドをしている。

深島は大分県の最南端に位置し、住民約一八人が暮らしている。それに、ネコ約一〇〇匹とヤギ二頭。蒲江から定期船「えばあぐりいん」で屋形島を経由して三〇分、サンゴ礁が広がる海と、カラスバトやムラサキオカヤドカリなどの国指定天然記念物が生息する豊かな自然が自慢。港か

ら一〇分も歩けば住宅はすべて廻れるし、島にいるネコの八割には会えるほど小さな島だ。島には病院も商店もなく、自動販売機すらない。昔は農業と漁業が島の主産業だったが、現在は漁業が一軒(親子二人)と、私たち家族が味噌づくりや食堂などをしているほかは、年金生活世帯である。普段はのんびりした時間が流れる島も、夏になると海水浴やマリンスポーツを楽しむ人でにぎわいをみせる。

深島との運命の出会い

高校卒業後、食について学ぶため、大分から広島大学へ進学。そこで食の生産現場に触れ、農林水産業を生業とする人たちのキラキラした笑顔が大好きになった。卒業論文を執筆する中で田舎の現状を目の当たりにし、机に向かうだけではわからない苦労や問題、そして魅力があるはず



島のネコと長女。島でのびのびと育っている。

だと感じ、田舎で暮らしたいと思うようになった。論文を書き終えるころには就職以外にも大学院進学や地域おこし協力隊への道など、将来への迷いが出ていた。先生方に相談し、卒業後いったん就職し、二年後に大学院へ戻つてくると決め、地元大分へ戻った。

地元の生協では予定通り二年間働いた。その後、フリーター生活一年間を経て、縁あって地元大分の大学院へ進学。フリーター時代は、いろいろな方と出会い、進路も迷ったが、結局、地元大分に落ち着いたのは、きっと深島に出会うためだったのだと思っている。

大学院入学前、大分県庁の方から、深島の活性化プロジェクトへ誘われ、二つ返事で参加した。大学院一年目の六月一日に深島へ草刈りのボランティアとして行き、その日初めて夫と会話し、「ヤギ、飼いたいね」と盛り上がり、勝手にさがして五日後には知人から譲ってもらえることになった。六月二〇日にヤギをもらいに軽バンで出かけたのが初デート。その日からほとんど毎週末は島に通い、夏休み

には丸二カ月間居候をした。大学院の二年間は島に通いながら修士論文を書き、卒業と同時に入籍、島に移住した。知り合う人には「たっちゃん（夫）がよっぽどよかったんやなー」と言われるが、深島に住みたいと思

っていたところに偶然いた人と気が合って結婚したという。私にとっては、深島ありきのたっちゃんである。

深島を守るため移住を決意した夫

夫が深島へ移住したのは二〇一三年、祖母ら深島婦人部がつくっていた島の特産品である味噌の製造を継ぐためだった。父方の祖母が深島に住んでおり、夫も幼少期を島で過ごしている。小学校三年生からは本土側の蒲江で生活していたが、毎週末島へ渡り、祖父母らと過ごしていたという。高校卒業後は福岡で就職し、一〇年間ほど土木関係の仕事をしたのち大分へ帰り、車の整備場やキャンプ場で働いた。そのころ、祖母らが高齢化のため味噌の生産中止を検討しているという話を聞いた。深島の味噌は島に代々伝わる麦味噌で、仕込みにかまどが使われるため、薪集めなど平均年齢八十歳代の婦人部には重労働だった。夫はつねづね「将来は深島に帰りたい」と思っていたようで、この話を契機に帰る決意をしたという。祖母が守り続けてきた味噌と、深島を守るためである。

同年春には「でいーぷまりん」という組織を立ち上げ、味噌の生産を引き継ぎ、さらに深島の自然を知ってもらいたいとシユノーケリングなどマリンスポーツのガイドも始めた。その矢先、県庁の方から総務省のソフト事業（「過疎集落等自立活性化推進交付金」実施の知らせをうけ、「深島食堂」の建設（交流拠点等整備事業）と、マリンスポーツの体験ツ

アー（交流促進事業）などに着手。その事業のなかで私達夫婦は出会うことができた。

一八年ぶりの赤ちゃん誕生

「でいーぶまりん」を立ち上げて五年、何もなかった島に唯一の食堂ができてもうすぐ丸四年になる。古民家を改装した宿泊施設「しんきや」は、より島の雰囲気味わってもらえるよう、今年から本格始動。きれいな海と小さな島という話題性、近年のネコブームのおかげで、メディアに取り上げられることも増えた。ありがたいことに、島に来てくれる方は年々増加しており、リピーターも多い。味噌の販路も広がり、ネット販売も開始した。

二〇一六年には、島ではおよそ一八年ぶりの子どもとなる長女が誕生した。妊娠中から島の方に大切にしてもらい、八十歳代のばあちゃんが「荷物もっちゃろうか」と声をかけてくれることもあった。産まれてからも島の人みんなが見守ってくれ、のびのびと育っている。今年三月に第二子となる次女が産まれたが、義祖母はじめ島の方が長女をみてくれるのでとても助かっており、この島で子育てができよかったです。子どものこと以外にも、野菜や魚を分け合ったり、おかずをもらったり、壊れたものの修理をしたり、島の全員が持ちつ持たれつ、助け合いながら生活していることがとても居心地よい。

また、島の人のみならず、来島されたお客さんにもよく

してもらっている。長女が生まれた時にはお祝いをいただいたこともあった。お手紙を届けてくれる人もいれば、毎年夏に会いにきてくれる人もいる。お客さんとしてのお付き合いではなく、人と人とのつながりを実感できる素敵な仕事、とても良い生活をさせてもらっている。

生きていくことが仕事

島での仕事は、主に味噌の仕込みと食堂の運営。具体的には味噌の仕込みに使う薪集め、食堂で使うための獲った魚の処理、野菜を育てるための畑づくりなどだ。一方、海に遊びに行ったり、草刈りをしたり、拾った流木やシーグラスで工作をしたりもする。仕事と生活の境目があいまいで、生きていることが仕事につながっている感覚である。私自身、そんな生活を望んでいたのだが、実際にしてみると戸惑いも多い。とくに子どもができてからは、家事や育児と食堂などの仕事の両立の難しさを痛感している。それこそ、義祖母や島のおばあちの協力なしには成り立たない。また、畑仕事など、したくてもなかなか手が回らず、やきもきすることもある。それでも目の前に広がる海を見ていたら、い



味噌仕込みの様子。かまどを用いて、すべて手作業で仕込むため、島でしかつくれない味噌である。

島からのメッセージ

●孫に引き継いだ「深島みそ」づくり

私は深島の生まれです。中学卒業後、福岡に奉公(仕事)に出ましたが、数年で島に戻り、結婚しました。小さいころに両親を亡くし、祖母に育てられました。祖母には子どもが11人おり、上から4人目の唯一の男が私の父です。下の2人の子ども(叔母)とは、姉妹のように育ちました。私が小さいころ、深島は学校の生徒だけで60人、全体で200人近くいたのではないのでしょうか。農業と漁業をしており、学校には通っていましたが、勉強はせず、畑仕事や家事、子守りなどをする毎日でした。

結婚後は4人の子どもに恵まれ、忙しい毎日でした。いつの間にか魚が獲れなくなり、人も減り、子どもも大きくなっていました。そんなとき、役場の人から「島で何かつくって売ってみないか」と話をもらい、島には味噌しかない、島の婦人部で「深島みそ」を商品化しました。町から味噌生産施設を建ててもらったのが平成8年、それから約20年つくり続けていましたが、部員の平均年齢が80歳にもなり、みんな足腰が痛くなり、やめてしまおうかと思いました。そんなとき、孫の達也が島に帰ってくると言ってくれ、味噌づくりを手伝ってくれるようになりました。覚えるのも早く、1、2年後には安心して任せられるようになり、今では完全に任せています。仕込みの時には島のおばあさん3人で手伝っています。包装もおしゃれになり、商品も増え、これからはますます楽しみです。

また、食堂や宿泊所、海水浴に来るお客さんも増え、島に活気があり、にぎやかだった昔を思い出して懐かしく思っています。島の人々も、お客さんと交流ができることで、とても良い刺激になっています。

さらに曾孫が2人、島にいてくれることがとてもうれしいです。私以外の島の人にとっても、子どもが島にいること自体が本当にうれしいことです。子どもは島の宝。これからの成長がとても楽しみです。そして深島を守り続けてくれることを願っています。(深島婦人部/達也の祖母 安部ヒサヨ)

安部あづみ (あべ あづみ)

1988年生まれ。大分県由布市挾間町出身。祖父母が同県竹田市久住に住んでいるため、小さいころの遊び場は山。自然好きな両親の影響もあり、自身も自然好きに。広島大学卒業後は地元大分の生協に2年間勤務。1年間のフリーター生活を経て、大分大学大学院へ進学。田舎のパワフル母ちゃんにあこがれ、田舎暮らしを夢見て、大学院入学後間もなく深島に行き、夫と出会う。卒業とともに結婚、移住。牛やヤギが好きな2児の母。



ウェディングフォト。味噌生産施設の前で。

つの間にか落ち着いている。私たちは結婚式をしない代わりに、島でウェディングドレスを着て写真を撮ってもらった。島の皆さんが祝福してくれ、ここにきて

本当によかったと思った。ここには昔ながらのコミュニティ、支え合い、助け合いの生活が残っている。きれいな海も、豊かな自然もある。この大好きな深島を意地でも守りたい。味噌づくりや夏場の繁忙期に少しでも雇用を生み出し、島に通ってくれる人、ゆくゆくは移住してくれる人が現れてくれることを期待している。そのために、まずは

私たちの生活を安定させ、この小さな島で楽しく暮らしながら、深島のファンを増やしたい。